

# 西洋人はシナ語をどう見てきたか

—アウグスト・シュライヒャーのばあい—

田中克彦

ここで「西洋人」という語は、インド・ヨーロッパ系の、どれかの言語を母語としている個人のことを指しており、そのかぎりでは言語的概念として用いることにする。しかし、非西洋に対立させられた「西洋」の概念には、どうしても言語外的な考慮が入らざるを得ない。このばあい言語は文化の一部と考えられるか、そこまで進まなくとも、文化の背景と切りはなしがたく結びついたものと考えられているからである。本篇でも、そのことに多少かかわった問題がとりあげられるが、ここでは、「西洋人」はなるべく禁欲的に限定して、「西洋語人」の意味で理解しておきたい。

また、この「西洋語」は、くわしく言えば、インド・ヨーロッパ系の言語であれば、そのいずれによっても代表され得るものとは考えない方がよい。たとえば、英語は、この点では「西洋語」のイメージから最も遠いところにある。それは、この印・欧一族の言語の中では、「最もすり減っていて、文法語尾は最も貧弱」(eine der abgeschriftensten, an grammatischen Endungen ärmsten Sprachen unseres Sprachstammes — A. Schleicher) になってしまっているからである。したがって、使い古され「すり切れ」てしまう以前に若死にしてしまった、ラテン語とか古典ギリシャ語とか、あるいはそのようなヨミの国にまで降らなくとも、この現世のことばとして、まだゴツゴツとした棘でおおわれている、ドイツ語とかロシア語とかの、より原始に近い言語で代表させて考えた方が適切であろう。(私がここで、それぞれの言語について用いた、生物学ごのみのたえは、すべて、シュライヒャーの精神が乗りうつったゆえのものであって、私のしらふの表現ではない)

他方、この「シナ語」という語は、政治的な顧慮によって一般化された、通用の「中国語」を、より言語に即して、厳密に言い表わしたいという意図から、敢えて用いたものである。「中国」は国家という、政治的単位の名ではあっても、言語の分類とは関係がない。ここでは、この語によって中国国家内で話される55余の言語のうち、

最も優勢な「漢族によって話される言語」のことを指す。そして、これから述べられる、シュライヒャーの時代に、西洋人が主として知識を得たシナ語は、だいたいに於いて、我々がカンブンと呼んでいる、オトがなくて、あるいはオトがオトとして示されなくて、文字のみによってできている「文字言語」(Schriftsprache)のことであると考えてよい。

奇妙なことだが、人は自分の母語以外のことば、たとえば方言とか外国語とかについて、ほとんど具体的な知識が無くとも、ある観念を抱いている。その方言や言語を、経験によって知り抜く以前に、人々に抱かれるこのような観念は、社会的に形成され、社会によって外から与えられるという意味において、またこの観念はステレオタイプな偏見として、その言語や方言を話す個人や、これらのことばによって作られた文化を見る目を限定するという意味において、すぐれて社会言語学的な関心の対象となる。このような偏見は、しばしば、その言語が用いられている国家の経済的文化的達成によって左右される。すなわち、方言あるいは言語に対する評価が、言語それ自体から生ずる度合いは極めて低いのである。

さて、このような点からシナ語を見ると、それは西洋において、アジアの諸言語のうちで最も著名な言語の一つでありながら、最も知られることの少ない言語である。少なくともこの言語が大衆的に学ばれる基盤は今までほとんどなかった。それ故に、この言語に与えられた大衆的な評価やイメージは、極めて安定したものであり、変化することはなかったのである。

今日のごく普通の西洋人がシナ語に対して抱くイメージは、シナ語そのものよりも、その外被であるカンジによって作られてきたと言ってよい。それは、かれらにとって、何よりもまず、数万個にのぼる、えたいの知れない記号を征服せずしては近づき得ない言語であるという印象を与えている。勉強家のエンゲルスは、アラビア語をかじったとき、その文字は「こどものおもちゃ」であり、「悪魔の文字」だとののしたが、ヨーロッパのアルファベットと同根の文字についてさえこうならば、カンジについてはどんな感想が聞かれたであろうか。それが残っていないのはすこぶる残念な気持がする。かれは、このいわば「超悪魔の文字」によって自分の思想が読まれることに、ただちに賛意を示すのをはばかったにちがいない。こうした文字を操る人間の頭の中に、いったいどのような思考が宿るのだろうかと大多数の西洋人が驚きを表明してきた。そこから、シナ語はえたいの知れない、特別なアタマを持った「秘儀的な集団のジャルゴン(隠語)」を指すたとえとして用いられる伝統を生んだ。たとえば、東ドイツの新聞は、どのページを見ても、党的な政治用語と文体にあふれているので、人々

はこうした新聞のことは「党シナ語」(Parteichinesisch)と呼んでいるということだ(P. von Polenz, *Geschichte der deutschen Sprache*, 1972, S. 183)。その文脈において「党シナ語」は、党外のしろうとはわからない、あるいはわかられることを期待していない、仲間うちの勝手な隠語だという意味で用いられている点で、冷笑的な表現である。ちなみに、シナ語本国では、毛沢東は早くから、党員に、党と大衆との間を引き裂く、「党シナ語」、すなわち「党八股文」の使用をいましめているのであるが(『整風文献』)。

「党シナ語」のほかに、いま一つ、私のメモから、Jörg Zink という作家の経歴について述べた文にあらわれる次のような用例をあげておきたい。

かれは若い人たちとつき合っているうちに聖書をいまのドイツ語に翻訳しよう、そして、同時にこの翻訳を通じて、読者を聖書の古めかしい教会シナ語(Kirchenchinesisch)から解放するための注解を試みようと思いつくに至った。(Ikubundos *Deutscher Literaturkalender*, Juli 1978)

ここでは、前掲の「党シナ語」とは異なって、「古めかしさ」、「抹香くささ」という別のイメージが加わっている。両者に共通して、「硬直した」というイメージも重ねることができよう。私のドイツ語経験が浅いために、いまずぐに上の二語以外の用例を掲げることはできないが、ある特殊な方向に進んだ文体や表現をあらわすために「シナ語」のイメージを利用した造語は、生産力に富んでいて、他にもいろいろと用例があるはずだと思われる。

こうした、シナ語についてのまったくのしろうと理解のほかに、この言語の性格や機能に関心を向け、たとえばゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツの『漢文経緯』(Chinesische Grammatik)などを頼りにある程度の知識をたくわえた知識人による性格づけがある。フリッツ・マウトナーの「目ことば」(Augensprache)、「絵ことば」(Bildersprache)、「本ことば」(Buchsprache)などがそれで、これらの表現は、いずれも、ことばのオトを示すのではなく、オトを通さず、じかに概念と組みあわさった文字による言語であることを言おうとしている。じつは、西洋人にとっては、そんなものは厳密に言って「言語」ではないのであるが。この点では、「紙ことば」(Papier-sprache)というのが、彼の作品としては最も秀逸なできばえと評することができる。「文法、シンタクス、内容は、この言語ではすべて紙の上にある」(Beiträge zu einer Kritik der Sprache II, 1923, S. 316)からである。

「紙ことば」もまた西洋人にとってはほめられた表現ではない。ことばはまず、ひびきのよいオトでなければならないのであって、見ることばなどというのは、（ちょうど「身ぶりことば」がことばでないように）ことばの定義に反するのである。この考えかたはたとえば、次のような文章によく示されている。

単に書かれるだけの詩句が読むに値することは稀であるし、やはり口に話されない哲学書は、ことばに強い人だけには良い印象を与えるかもしれないが、その内容のすばらしさにもかかわらず悪い作品であることに変わりはない。それをいい作品だと言うためには、シナ語で書いてなければならないだろう。(C. G. Jochmann, *Über die Sprache*, 1828, S. 200)

実際にはシナ語の韻文が、いかにオトのひびきを重視したかを考えるならば、こうした理解はまったく的外れではあるが、シナ語そのもの——つまりオトをもった言語として——を理解せず、あるいはオトを無視してただひたすら、文字のカタチだけを手がかりに意味をとろうとする、外国人用のカンブンは、まさにこのように把握しても誤りではないだろう。マウトナーがこのことを、「カンジはどんな外国語でも読めると言うのは逆説ではない」(*Beiträge II*, S. 318) というのも、こうした意味においてである。

このようにして、西洋人にとって、カンジ、カンブンは、本来の意味における文字でもなく、ことばでもないのに、文字それだけで意味を伝えることのできるふしぎなことば、「帝国を統一する紐帯」としての「紙ことば」として思い描かれたのである。

ことばはまずオトとしてあらわれるのであるから、オトを伴わない、あるいはオトとして表現されないいかなる部分も、言語には属さないとする、西洋流の考えかたの発生がいつの時代にさかのぼるのか明らかでないが、たしかなことは、この考え方は、はじめに述べた典型としての西洋語そのものの中から出てきたものと言えるであろう。

シュライヒャーによれば、

思考を音的に分解した表現である言語が、あらゆる精神の動きをオトのかたちにおいて示せば示すほど、それだけ一層言語は完全であり、オトが思考の背後にかくれて、いわばその略号になってしまうと、言語はいっそう不完全になるのである (*Die Sprachen Europas in systematischer Übersicht*, 1850, S. 5-6)。

ここでシュライヒャーの言わんとするところをよりよく理解するためには次のことを理解しておかねばならない。すなわち、「あらゆる思考にあって、概念、表象は何らかの関係に置かれており」、「この概念、表象は思考の材料部分 (das Material) であり、その表象の把え方であるところの関係は、形式部分 (das Formelle) である。そして「完全な言語であれば、この両者ともに正確に再現しなければならないのに、不完全な言語は、状況がいくらかでも明白に見てとれるようになっていれば、それで済ませてしまうのである。」ところで、「表象や概念のことを、それがオトで表わされていると思われるとき、それを意味 (Bedeutung) と呼ぶことにしている。」つまり、ここで言うところの意味は、より詳しく言えば言語的意味のことであるが、意味が言語的であるためには、それはオトの形をとっていなければならない。ということは、言語が言語であるためには、オトという形であられるかぎりにおいてであるということになる。ここから、シュライヒャーの次のような決然たる表現があらわれるのは自然なことである。

言語の本質は、したがって、そこにおいて意味と関係とがオトで表現されるその仕方の中にある。 (Schleicher, 1850, S. 6)

この同じ考えは、その2年前のかれの著作の中にも次のように言い表わされている。「言語すなわち精神的生の、音による分節表現の本質がしかし、意味と関係とが組み合わさる、そのかかわりの中に求められるのは、当然で、議論の余地の無いところである。それぞれの言語が、意味と関係とがどういう風にしてオトで表わしているか、その仕方によって言語の性格がきまってくる。」 (Zur vergleichenden Sprachgeschichte, 1848, S. 6) 言語記号の成立にオトが不可欠であるというこの考え方は、その後、ソシュールの記号の概念にもそのまま受け継がれており、そこでは、記号は concept と image acoustique (聴覚映像=オトのイメージ) から成るとされている。つまり、言語記号にとって不可欠の要素はオトであって、目で見るだけのものは言語記号ではない。

ところで、言語において概念と概念、意味と意味との関係を示す部分は、形態論 (モルフォロジー)、ドイツ語ふう言えばカタチ学 (Formenlehre) として扱われるが、それがはっきりとオト (lautliche Form) として表わされるか、それとも状況によって、あるいは文脈によって当然わかるものとして省略される (explicit なかたちをとって言い表わされない) かどうかによって言語の完全度がきまるのである。こ

れを、今様に言えば、形態論の発達している言語ほど完全に近く、語と語の関係が、言語的に（すなわちオトによって）明示されず、解釈が状況に依存しているばあいは、言語として完全ではないことになるのである。

もちろん、あらゆる状況抜きで、言語それ自体のレベルで、あるテキストが完全に理解できるような言語は現実には存在しない。人間は少なくとも今までは、そのような言語を日々の生活で用いることを欲しなかった。テキストの理解には多かれ少なかれ状況が必要である。そのことは、チョムスキーが、英語の多義文を示すことによって、明らかにした。たとえば *Flying planes can be dangerous.* という一つの文が、「飛んでいる飛行機はあぶない」と「飛行機を飛ばせるのはあぶない」とふた通りの解釈を許すという例がそれである。しかし、

城春草木深 = Castle Spring Grass Tree Deep

のような表現は、西洋人にとっては、そこに語の羅列はあっても、それらの語の相互の関係をとりまとめ、自立した表現に仕立てあげる、どんな言語的手段も現われていない以上、成熟した言語とは認められないのである。とりわけ、最後の「深」の概念は、英語のように「すり減った」言語ですら、*deep* か、*deepen* か、それとも *depth* かというふうにいわれる品詞に弁別する手段をもっているし、日本語のように「不完全な言語」でも「フカー」に「一サ」、「一ミ」、「一マル」、「一イ」などのオトをつなげて、この概念の文中における役割りを言語的に明示することができる。

西洋人、あるいはそうでなくとも日本人であってさえ、極端にこうした明示の手段をけちったカンブンをを見ると、それは、幼児の舌たらずのことばとしか思えない。そこで F・マウトナーは、「シナ語は我々〔ドイツ人〕の 2 歳児のことば同様に孤立的である」と言ったのである。言語類型論上のこの「孤立」という概念は、マウトナー式に言えば、「オジサン・ハンス・タマゴ・クレル」というような表現で説明できるだろう。また、日本人がカンブンを読みくだし文にするあの作業は、そこに文法的な解釈を加えて、二歳児の言語表現をせめて十二歳のレベルまで引き上げてやる作業にはかならない。シナ語はその構造からみて二歳児のことばだといった類の見方は、しんらつな表現にたけているマウトナーだからというのではなく、すでに 1860 年に、アーデルンクは、『ミトリダーテス』の序文において、シナ語は「諸言語のうちの赤子」であって、この種の単音節言語を話す民族は、「まだ人類の幼児期の最初の言語を回らぬ舌でしゃべっている」ようなものであると評した。

シナ語は西洋人による諸言語の類型論的な比較研究の中で、いかなる文法要素をも持たない、最も原始的なタイプを代表している点で注目を浴び、現実存在し得る言語の、一つの極限状態を示しているものと見なされた。言語としてのシナ語に興味を持たれたのは、そのような珍しい化石を見るような関心からであった。その対極にはいつもサンスクリットを置いた上で、シナ語は A. W. シュレーゲルによって、「いかなる文法構造も持たない言語」(1818)とされたが、「文法構造を持たない」ことが、かならずしも、「原始的」であったり、「低い発展段階」にあるとは、ここでは考えられていない。それが、発展段階にむすびつけられる契機は、たとえばアーデルンクによる、語根だけからなる単音節言語と語根以外のものを含んで拡大された多音節言語という対比の中にある。コセリウは、「ウィルヘルム・フォン・フンボルトの言語類型論について」(1972)の中で、フンボルト前後の時代における類型論の議論の展望を試みながら、こうした、シナ語を含む、さまざまな言語の類型をとり扱うなかで、このような類型が、常に発達段階の高低に対応させられていたのではなく、アーデルンクを除けば、それを迷うことなく発展段階のものさしの上に並べたのはシュライヒャーであったと述べている。コセリウはこのばあい、非常に注意ぶかいやりかたで、フンボルトの示した類型図式を「発生的に解釈してはならない」として、フンボルトに、類型を発展段階に対応させる、危険な議論にコミットさせないようにあらかじめ防衛している。しかし、これら19世紀のすべての論者たちがあらゆる発展段階的な見方から自由であったと考えることはむずかしい。おそらくフンボルトに、その決定的な一步を踏み出させるのを思いとどませたものは、この二歳児の舌たらずの幼児ことばであるシナ語に、なぜあのような文化的達成がなし得たかという問いに対する答えが用意できなかったからであろう。シナ語人ないしはシナ語民族が、もし歴史の上に名をとどめることなくみじめな未開の状態にあれば、それを現実の証拠として、かれらは安心して、単音節で孤立構造の、文法の無いシナ語に、言語の発展段階の上でも、最も低い場所をあてがうことができたであろう。フンボルトの次のような発言には、こうした、言語外的なことからよって判断をくもらされない、西洋語人としての率直な見解があらわれているものと思われる。

この言語をどんなに断乎として弁護しようとする人でも、この言語が、そこから詩と哲学、学問研究と雄弁な講演とが、そろってすくすくと咲き出るような真の中心へと、精神活動を導いて行ってくれるとは、ちょっと言い張れないであろう。(Ueber die Verschiedenheit S. 656)

しかしそれにもかかわらず、シナ語人の作った文明の完成度はおそるべきものだとかれは見た。フンボルトはこのことを十分考えあわせた上で、新しいリクツを編み出して、次のように言わざるを得なかったのである。

いかに逆説的に聞こえようとも、次のことはたしかだと思う。シナ語にはいっさいの文法が欠けているらしい、まさにこのことが、言語表現に形式的な連関を認識させるカンの鋭さを、この民族の精神の中で高めているのだということが。ところが文法的なつながりを表わすのにひどく凝っているながら、それでいて不首尾なやり方は、むしろ精神を鈍麻させ、さらに実質の重要度と形式の重要度とを混同することによって、文法感覚をくもらせてしまっている。

これは逆説だと思うなどと言われても、逆説以外ではあり得ない。シナ語は文法感覚を発達させるのだと言い、さらに文法の発達している言語は精神に有害だと言っているからである。ここでは、文法のないことが、その言語にとっての美德となっている。

シナ語の形式は、おそらく他のいずれの言語よりも、純粋な思考の力を表明しており、またそれは、あらゆるこまごまとした、わずらわしい接続音を切り落しているために、魂は、ひたすら思考をめざして緊張し、専念するのである。

シュライヒャーは西洋の伝統にしたがって、後に、思考はオトに支えられて、真の思考になると言っているのに、フンボルトはここでは逆に、形態要素を示すオトは「わずらわしい接続音」だとまで言ってしまい、それが無いゆえに、シナ人は、文字に文法を補ってやろうとして、文の前に立たされたとき、いつも文法を作ってやっているのだと言っているふうである。

フンボルトのもう一つの逆説は、屈折を最も豊富に保持したサンスクリットを一つの極とし、次には、あらゆる文法を拒否したシナ語を他の極に置き、そのいずれもが「完全な言語」だと述べたことである。一方は屈折を徹底的に用い、他は拒否する点において徹底して完全であるからという。しかし「完全」という意味のこのような用法は成り立たないであろう。

フンボルトとは異って、決然として言語学の中に進化主義を持ち込み、生物学における有機体の発展段階をそのまま言語の発達に対応させた自然科学主義者のシュライ

ヒャーにおいては、このような逆説に訴える逃げ道は開かれていなかった。

意味と関係とが、いずれもオトにあらわされながら、しかも語の統一が保たれている。この段階こそは最高のもので、精神の過程、すなわち思考の忠実な像を映し出すものだ（1850, S. 9）

この理想型を実現したのが屈折言語で、それらは言語のハシゴ（Scala）の最も高いところに登りつめた姿である。こう述べたシュライヒャーは、しかしそこでとどまらなかった。

屈折語のみが、すなわちインドゲルマン語とセム語のみが今日まで世界史の担い手であった。言語の領域において、これらの言語がそうであるように、それを話す諸民族も、人類のその他と比較してみると、断然、最高の段階にある。したがってかれらのもとには、ヨーロッパの非屈折言語には欠けているところの、古代からの言語作品（Literatur）が存在しているのである。（1850, S. 37）

ここでは言語の発達段階に精神の発達段階が完全に対応させられた。そして、ヨーロッパ全域にわたる言語を、その発達段階のはしごの上に並べることが、かれの著書が意図した「諸言語の体系的（systematish）な概観」の方法であった。だからこそ、話はヨーロッパのことでありながら、特にシナ語だけは、そこでまずはじめに詳細に述べねば「体系的」になりようがなかった。シナ語の概要を述べないでは、ハシゴは組み立てられないからである。

ところで本篇の冒頭にも引いたように、これら世界史を担った西洋諸言語の中にも、英語のように、いちじるしく孤立化し、シナ語化した言語がある。フンボルトにあっては、シナ語の存在が、言語の類型を発展段階のハシゴの上に順序よく並べる冒険にのぞんだとき二の足を踏ませたが、シュライヒャーにあっては、かれは進化論を維持したままで、言語の進化がそれ以上もはや進行せず、逆に言語の没落が生じる時代を考への中にとり入れて、この難問を切り抜けたのである。

歴史が登場するや、精神はもはやオトを作り出さず、オトに対立し、それを手段として用いる。言語はもはや発展せず、逆にますますすり減って行く。諸言語の形成は、このように歴史以前に生じ、没落は逆に歴史時代に生ずる。したがって言語史

は次のような、全く異なる二つの時代に分割される。1. 言語の発展の歴史、先史時代。2. 言語の没落の歴史、歴史時代。(1850, S. 13)

この言語の没落のしかたには法則がある。歴史の中で精神が展開すればするほど、精神はますますオトから離れるから、その結果、屈折は「すり減る」のである。そして、この言語の没落は人間の「自由な意志決定の外にある。」なぜなら、それは、「人間というものの、自然の本性に属している」からである。

シュライヒャーが、言語の発展段階に没落期を設けたのは、かならずしも「すり切れた英語」を体系の中にとり込んで、かれの理論的整合性につじつまをつけようとしたからではなくて、かれが、言語を自然とみる言語観の本質に発しているのである。かれの次のような議論の出発点は、かれの論のどの部分をとってみても一貫して保持されている。

言語と自然一般とのアナロジー、すなわち、言語は自然に属しているのであって、自由な精神活動（歴史）の領域に属しているのではないということから、言語それ自体を対象とする科学がとるべき方法を見出すために出発しなければならない。(1850, S. 21)

歴史の道具は文字（Literatur）であったが、ほかならぬ文字によって、「言語の没落」は促進されたのである。

シュライヒャーはシナの文明を前にして、フンボルトのようにはたじろがなかった。かれはシナ語とシナ文明がさし出す難問に直接答えてはいないが、シナ語が、西洋語的な視点から言語そのものとして花開かなかったのは、Literaturがそれを抑え込んだからだを見た。このような見解は、「文字がこの言語の原始的な貧しさの埋め合わせになっている」という、フンボルトの感想と一致している。

マウトナーに言わせれば、現代の諸言語は、学者による文字言語としての使用が頻繁になればなるほど、ますますシナ語に近づいている。19世紀から20世紀に入るとともに、言語の科学は、進化への関心を自らに封じ、あらゆる言語の現実をシナ語へと生成還流させるチョムスキーの好みも、深いところでマウトナーの指摘した傾向に沿っているのかもしれない。しかし、このようなことは学界においては、重要だが軽々しく言うてはいけないことがらに属する。

私は、永い間、ソビエトのマル主義を含む、さまざまな学説の中にくりかえし顔をあらわす、シュライヒャーの、言語における進化主義に関心を抱きつづけてきた。その進化主義的解釈の意味は、シナ語という現実によって測られるだろうという予想を抱いて本稿を書きはじめた。そしてその結果、慎重な装備を身につけた上でなくては、決して踏み込んではいない、言語の底無し沼に引きずり込まれそうな危険に圧倒された。だから、本稿のこれよりあとに立ち現われる、多様で深い問題については、次の装備をかためてから挑むことにして、ひとまず現場から引き揚げることにする。

この一文は、今は亡き増谷先生に捧げられる。そのことは大変ふさわしいと思うので、その理由を以下に述べたい。

増谷先生と私とは、大学院社会学研究科の入試や論文審査のうちに、いったい既設のどのような学的分野に分類していいかわからぬような、コントンとして個性的なテーマをひっさげた志願者の論文や口述に立ち合わされることがよくあった。学務委員は、増谷先生と私の力量を買って、そのような配役をきめたのか、それとも、こうしたモヤモヤ・テーマを迷惑がって、そのモヤモヤの掃除人として適当だからというので、先生と私とを選任したのかは明らかでない。しかし私は最も社会学部のスタッフらしい任務を与えられたのだと思いそのつど満足した。頼みの綱は増谷先生であった。なぜか。先生は、もやもやと、とらえどころのない、暗い森の中でうごめく何かに、明快らしく聞こえることばで形をつける特別の才能をもっておられた。先生の口がおもむろに動きはじめると、私はもう大丈夫だと胸をなでおろしたものである。驚いたことに、聞いている人たちもまた先生の説明を聞いてなっとくしたような顔をしたのである。私はそれが、先生の人柄によるものか、この人の精神の深奥から発する才によるものかと答えをさがしながら驚嘆したものである。

私はいまこの一篇が、もともと明快であるはずのことを、かえってもやもやさせてしまったのではないかとおそれるにつけ、いやでもおうでも、ありし日の先生の、あの時この時の情景を思い出さずにはいられないのである。